

応援、母ちゃん！

—子育てしながら働く母親たちのリアル—

10

たまむら ふみ

玉村 文

1. はじめに

2022年4月に育休明けで仕事復帰をしました。2022年4月で1歳になる長女は、3歳の長男とともに保育園に通うようになり、平日の日中はそれぞれで過ごすようになりました。子どもたちは個別性を伴いながらも成長しています。その様子を記憶しておきたいのに、日々の生活に追われて写真を整理したりマメにできていません。この対人援助学マガジンの連載は、年4回の発行に合わせて、子どもたちとの思い出を記録化することに役立っています。

2. 育休明け職場復帰

育休からの復帰は2回目ということもあって、焦らずにいこう、でもできることは全部取り組むというスタンスでいると、1回目の育休復帰のときよりも早く仕事に没入しました。その結果、気づけば業務量を調整しないと時短勤務の枠組みで収まらないことになっていました。

子育てと仕事を両立するということは、子どもの体調などで急に仕事をお休みする可能性があるという前提で仕事をするようになります。そのため、仕事を前倒しで進めていきます。子どもが2人になり、急に休む可能性も2倍になると思っていたことも、仕事を前倒しで進めていた理由です。しかしながら、蓋を開けてみると、子どもたちは今のところ元気であまり休むこともなく、

仕事を調整しないとイケないという事態にはまだ陥っていません。結果的に、自分の想像以上に、業務を進められ、役割を担えたこととなります。

3. モチベーションを高く保つために

子どもが生まれる前まで、わたしはたくさんさんの業務が割り振られたり、役割を担えること、同僚から頼りにされることが嬉しいと思っていました。それが適量を超えている、例えば時間内に終わらず残業したり休みの日を仕事に使うという場合でも、モチベーションは高く保たれていました。一方で、子育てとの両立が前提となると、時間内に終わらない業務量を抱えることは、モチベーションを下げたてしまうことを体感しました。そこで、上司に業務分担で負担が多いことを伝えることができました。そしてすぐに業務量の割り振りの修正が入りました。業務量が減ったことで、休憩を取ったり、同僚とのコミュニケーションや関係者との情報交換などに時間を使えるようになりました。

仕事量が多くてもモチベーションが保たれていた時代と変わらないのは、業務を自分でコントロールしている感覚がもてていることが、わたしのモチベーション維持に役立っているということです。子育てでは、自己コントロールが効かないことも多いです。こちらの思惑や計画とは関係なく、子どもたちは自分の要求を出してきます。それに合わせて動くように、逆にコントロールされている感覚をもつこともあります。



また、子どもの生活リズムを守り、質の良い食事を提供したとしても、子どもの体調を完全にコントロールすることはできません。では子育てにはモチベーションがないのかと問われると、そんなことはなくて、子育てとはそういうものと受け止め、毎日格闘しています。子育てをしているからこそ、業務量や業務内容をコントロールできることは、モチベーションの維持や向上につながっていることを感じています。

4. 地域コミュニティに参画したい

わたしは私達家族が住んでいる自治体の「子ども子育て会議」に、市民公募委員として参画しています。市が行っている子育てにかかわる事業への評価や、事業自体に意見を伝えることが役割です。任期は2年で、もうすぐ任期が終わる時期です。

なぜこのような活動を始めようと思ったのかというと、子育てを始めてみると住んでいる地域のことをもっと知りたい、地域の役割をより担っていきたくと思ったからです。これまでは意識することがなかった地域との関わりが、子育てをして初めて場や人と出会うという経験をしました。民生児童委員さんが運営している居場所に入ったり、地域子育て支援拠点を利用することもあります。そのなかで、この地域で子育てをして助けられていることを実感し、それを次の世代にも返していきたいと思ったのです。たまたま、市の広報誌を読んで、「子ども子育て会議」の委員募集がありそれに応募しました。その後、市の担当部署

の方と面接をし、市民公募委員として委嘱されました。

年に3回ある会議は、コロナ禍で書面開催になったこともありましたが、対面で実施できたときは、司会の方の采配も上手なので、参加した委員全員が発言することができ、意見を伝え合う場になっていました。副委員長からは、「あなたたち子育ての当事者が発信することが大事だから」と背中を押してもらい、子育て経験を通しての困りごとや施策に反映してほしい意見を伝えたりしています。

例えば、雨の日に遊べる場所の確保はされているのに、夏の猛暑や冬場に子どもと遊べる場所の確保という視点が抜けている点を指摘したことがあります。この夏の災害級の暑さのなか、子どもをどこで遊ばせるのかは大きな困りごとです。地域子育て支援拠点もありますが、そこは圧倒的に0才児が多く、走り回る幼児を連れて行くと、赤ちゃんを踏んづけてしまうのではないかと躊躇を感じる環境です。地域子育て支援拠点の位置づけとしては、生まれてから就学前まで利用できることになっています。しかしながら、0才児の利用が圧倒的に多いのです。そこに走り回る幼児を連れて行くことに躊躇するという経験は、ママ友との間でも共有されていました。連れて行ってはいけないと思っていた、と話すママ友もいました。夏冬は行ける場所がなく、毎週末近所のイオンで遊ばせてるというママ友も。地域子育て支援拠点では、狭い空間のなかで赤ちゃんや幼児との棲み分けが難しいという問題もあります。幼児用の別の拠点が本当に必要なのかという意見もあると思います。どのような形で子どもたちが遊べ

る場所を確保できるのか、今後見守り続けたいと思っています。このように、実際の経験やママ友と共通して困っていることを意見として発信しています。

意見を伝えるだけでなかなか反映されないうらという意見もあると思いますし、わたしもそう思っていました。しかしながら、ある事業の名称変更を提案したところ、次の会議では名称の修正が入っており、意見が反映されるという経験もしました。

委員になってみて、子育て支援にかかわる行政施策が一覧で知れること、その背景や課題点、将来の展望にまで触れられることは、発見や気付きも多いです。例えば、幼稚園の需給調整の問題が話されており、保育園と比べて幼稚園の定員割れが顕著になっており、集団教育に支障が出ていること、公教育としての役割についても話されており、保育園しか経験していないわたしには、視野を広げること、問題は地続きであることを実感させられました。それらがどんな問題やテーマに発展していくのか、と想像力を働かせる機会になっています。

5. 「いま」だけでなく

「未来」を大事にしたい

業務量の調整をしてもらいながらではありますが、仕事と子育てとの両立をはかっています。どちらも精一杯やって力及ばずのことも多いですし、至らないこともあります。「いま」で手一杯ではあるのに、それでも、仕事と子育てだけではなく、地域コミュニティに参画し、未来を考えるような機会を大事にしています。わたしにとって、「今日」を無事に乗り切れることと同じくらい、「未来」のことを考えてより良い段取りを組んでいくことは重要なようです。育児から職場復帰をしても、それが変わらなかったことは発見でした。きっと、子育て渦中は近視眼的になりがちなわたしゆえ、視野を狭めないための一種の自己防衛なのかもしれません。